

井上ひさし『イーハトーボの劇列車』論

— 〈デクノボー〉としての日蓮—

鈴木 健 司

An Essay on *Ihatobo Play Train (Ihatobo Geki Ressha)*

— Nichiren Priest as a puppet figure —

Kenji Suzuki

In the play called *Ihatobo Play Train (Ihatobo Geki Ressha)* that treats the biography of Kenji Miyazawa, Hisashi Inoue courageously attempted to take up the problem regarding the Kokuchukai Clan. At that time, the clan was a Nationalistic group of Nichirenism. It is a known fact that Kenji was a member. In the early Showa period, which was in his later years, Japan had unstable social conditions with its own imperialistic policy of aggression. Our judgement about what Kenji's Nichirenism was is very important. Hisashi Inoue succeeded in demonstrating this in the biographical play, showing Nichiren Priest as a whining puppet figure.

The goal of this essay is to argue about Hisashi Inoue's understanding of Kenji Miyazawa by verifying the whining personality of Nichiren Priest, the most important theme of the play.

1、はじめに

宮沢賢治を扱った戯曲『イーハトーボの劇列車』は、新潮社版単行本(1980・12)に記されている「初演記録」によれば、「木村光一の演出に

より、三越・五月舎提携による五月舎25回公演として、東京呉服橋三越劇場において、一九八〇年十月三日より同二十三日まで二十四回上演された」ものである。また、本戯曲は、『新劇』一九八〇年一〇月号に掲載され、後単行本化された。本稿での引用は単行本（初版）による。

井上ひさしが宮沢賢治作品の愛読者だということは、「小学五年に『注文の多い料理店』や『ドングリと山猫』を読んでいらいずーっと賢治に狂い続けていたわたし」（「風景はなみだにゆすれ」（「国文学」昭五〇年四月号）という井上ひさし自身の言葉を紹介すれば、十分であろう。そのような井上ひさしが、戯曲『イーハトーボの劇列車』でどのように宮沢賢治を描こうと試みたのか、宮沢賢治を研究する者の一人として、興味津々たるところであった。

刊行当初、初読段階で感心したのは、劇のいたるところに、宮沢賢治作品が隠されていることだった。それが童話であったり詩であったり、時には書簡であったり、伝記的事項であったりし、そのことに気づくたび、くすくすと一人笑いし、さらには、どうしてこのようなマイナーな作品までテキストに隠し込んでいるのだろう、もし読み手が気づかなかったら苦勞して隠し込んだ甲斐がないではないか、と心配するほどであった。皮肉にも、後になって私自身気づくことができずにいた隠し込みのあることが分かり、井上ひさしの宮沢賢治作品の読み込みの広さ、深さに、あらためて脱帽することとなった。

このような劇作上の手法は、早くは『天保十二年のシェイクスピア』（1973・12、新潮社）で用いられている。井上ひさしは、趣向としてシェイクスピア全作品（37篇）をテキストに隠し込んだとされ、その苦勞はいかばかりかと推測されるが、隠し込まれたものがシェイクスピアの作品であることにより、読者（または観劇者）は、その人なりに劇を楽しむことができる仕掛けとなっている。「ハムレット」や「ロミオと

ジュリエット」の内容を全く知らないという読者は、おそらくいないはずで、また、すべてのシェイクスピア作品に精通している読者も、シェイクスピアの研究者を除けばいないはずである。つまり、誰でもがその人なりに劇を楽しめるのであり、シェイクスピアの作品を一作でも多く読めば、読んだ分だけさらに劇を楽しめるのである。『イーハトーボの劇列車』も同じ手法が用いられており、宮沢賢治のような国民的作家の場合、「雨ニモ負ケズ」や「銀河鉄道の夜」などは、内容の理解はともかく、いちおう日本中あまねく知れ渡っているといえ、その意味において、誰でもが楽しめる劇に仕上がっている。井上ひさしは『イーハトーボの劇列車』以降、石川啄木や夏目漱石、樋口一葉、太宰治などの文学者を題材に伝記劇を作っている。

2、井上ひさしが描き出した日蓮像

井上ひさしを追悼するにあたり、あらためて『イーハトーボの劇列車』を読み返し、井上ひさしに宮沢賢治研究上どのような功績を認められるのか、検証したいと考える。

結論から先に述べるなら、私は、〈宮沢賢治にとっての日蓮像〉に井上ひさしの宮沢賢治研究上の功績が認められると考えている。井上ひさしが『イーハトーボの劇列車』で描いて見せた日蓮こそ、宮沢賢治が抱いていた日蓮像に最も近いのではないかということである。それはどのような日蓮像なのか、日蓮像に関わる本文を次に引用する。第九幕「最後の滞京」の末尾付近である。

第一郎は襖をぴしゃりと閉め、変装を解く。

賢治 ……ほんとうに射つんですか？

第一郎 妹の仇討とアカ狩を兼ねているんだ。一殺多生、もちろん

やる。アカは念仏宗よりもおそろしい邪教だ、むろんやらねば日蓮大聖人の御教えにもそむくことになる。君も日蓮大聖人の門下だろう。これぐらい理解できるでしょうが。

賢治 おれ、立場がちがうす。

第一郎 なに？

賢治 おれは、日蓮大聖人を偉大なデクノボーだと思っています。日蓮大聖人はよくご自分のことを「だめな人間だ、愚痴の者だ、デクノボーだ」とおっしゃったでしょう。「だから自分はすべてののはからいを捨てて、仏に向ってただ一心に『南無妙法蓮華経』と題目を唱えるだけだ」と、こうもおっしゃったでしょう。

第一郎 待て。日蓮大聖人は「自分は菩薩の生れ変りだ。法華経の行者だ。仏の御教えを体して、自分がこの国土を浄土にするのだ」ともおっしゃっているぞ。

賢治 日蓮（と敬称をはぶき）は人間です、人間だからいろんなことを言います。心屈したときは、自分はデクノボーだと言います。心たかぶったときは、自分は世直しの救世主だ、とも言います。どっちも本心だったろうと思います。おれは三十五にもなってまだ親がかりです。デクノボーのなかのデクノボーです。ついに父ちゃをこえることができなかつた。とんでもないデクノボーです。いろんなことを企てましたが、すべて中途半端です。もうデクノボーの最たるものです。そういうデクノボーのおれは、だから日蓮のデクノボーたる部分に惹かれたのだと思います。おれは獅子のように吠え立てる日蓮は、あんまり好きではない。

第一郎 弱音を吐く日蓮なぞ日蓮じゃない。ぼくは断じて強い日蓮をとるぞ。

賢治 日蓮宗系統の新興宗教は、みんな強い日蓮にばかり目をつけています。バランスをとるためにもひとりぐらいデクノポーの日蓮を好きになってもいいのではないですか。

第一郎 弱い日蓮にどうやってこの世を浄土にできるのだい。「この世を浄土に」、これが日蓮の根本思想だぜ。弱い日蓮宗信者に、この世を浄土にかえることができるか。できないだろう、え？だとしたらもう日蓮宗信者じゃない。矛盾してるよ、君。

井上ひさしは、「弱音を吐く日蓮」と「強い日蓮」という、二つの日蓮像を提示し、宮沢賢治に「弱音を吐く日蓮」を選択させている。それは、「日蓮宗系統の新興宗教は、みんな強い日蓮にばかり目をつけています」という表現と対をなしており、「ひとりぐらいデクノポーの日蓮を好きになってもいいのではないですか」という作中の「賢治」の日蓮解釈が、当時の「日蓮宗系統の新興宗教」の日蓮解釈と異なる設定だということを示している。

宮沢賢治にとっての日蓮がどのような存在であったのか。一九一四（大正三）年に島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』を読んだことが、宮沢賢治の法華経信仰の契機とされているが、国柱会への入会という年譜的事実が、ことを複雑にさせている。一九二〇（大正九）年一二月の保阪嘉内宛の書簡 [177] に「今度私は／国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は／日蓮聖人の御物です。従って今や私は／田中智学先生の御命令の中に丈あるのです」、同じく同年一二月と推定される簡 [178] に「どうか殊に御熟考の上、どうです、一諸に国柱会に入りませんか。一諸に正しい日蓮門下にならうではありませんか」とあり、国柱会の要素を抜きに宮沢賢治の法華経信仰や日蓮への傾倒の問題を語ることのできないことが分かる。

国柱会とは、田中智学が設立した純正日蓮主義を主張する在家仏教団体で、「国体護持」を標榜する国家主義的な側面を強く持つ。宮沢賢治の国柱会への入会時期ははっきりとしていないが、一九二一（大正10）年一月の突然の出京は、国柱会での本格的な活動を目的としていたことは確かなことで、宮沢賢治の童話の創作も、国柱会の理事・高知尾智耀の勧めにより「法華文学ノ創作」を目指したものであった（『「雨ニモ負ケズ」手帳』メモ）。したがって、もし宮沢賢治作品に対し研究的に接しようとする場合、われわれはどうしても、国柱会という中間項を設定しなければならないことになる。

そこで問題になるのが、国柱会の国家主義的な側面である。「批評空間」（Ⅱ-14、平9）に掲載された「【共同討議】宮沢賢治をめぐる」における関井光男、村井紀、吉田司、柄谷行人らの発言は、宮沢賢治の作品を国柱会の思想から解釈し直そうとする試みである。たとえば、関井光男の賢治批判を私なりにまとめてみるなら、宮沢賢治の法華経理解はすべて田中智学の国柱会から得たものであり、したがって宮沢賢治の思想は国家主義的なファシズムを内包している、ということになる。

関井 一略— 賢治の「法華経」の知識は、大正三年にでた田中智学の『本化妙宗式目講義』や『日蓮聖人の教議』を読んで得たものです。それ以上じゃない。それに日蓮の遺文というのは、どれがほんものか、明治になってわからなかったです。／それを整理したのが田中智学なんです。だから、日蓮の遺文や御書を読むには、僧侶といえども智学の整理した『類纂高祖遺文録』（一九四二）を見るほかなかった。

関井光男の発言には資料レベルでの間違い（または誤植）が多く、

たとえば、『本化妙宗式目講義』は「講義録」の「録」が脱落し、かつ「大正三年にでた」のではなく、明治三七～四三年の刊行である。また、『日蓮聖人の教義』の「義」は「義」の誤りで、『類纂高祖遺文録』の刊行は「(一九四二)」でなく、一九一五年（大正四年）である。単なる誤植と判断される個所はともかくとして、関井光男の主張の中心と思われる、宮沢賢治の『法華経』の知識は、田中智学の『本化妙宗式目講義録』や『日蓮聖人の教義』を読んで得たものでそれ以上ではない、という認識は明らかな間違いである。詳しくは拙著『宮沢賢治という現象―読みと受容への試論』（第3部第4章、蒼丘書林、2002・5）を参照願いたい。

しかし、関井光男の発言が正確なものでないからといって、宮沢賢治が田中智学の『本化妙宗式目講義録』や『日蓮聖人の教義』を読んでいたことが事実である以上、宮沢賢治における国柱会の思想の位置づけは、研究上の大きな課題として現在も残されているのである。

井上ひさしは国柱会に関し、劇中どのように描いているのだろうか。腕の見せ所といった場面でもある。

第一郎は襖を閉め、ピストルを仕舞って、己が変装を解除する。

賢治（ずーっと仰天していた）ピッピッピッ……ピストルを持っていましたね。

第一郎 ああ、ケイ子を玩具にするような野郎は、胸を鉛の塊で貫かれてくたばるがいいのだ。

賢治 それはいけない！

第一郎 大丈夫さ。やつはアカの手先だもの、かえって特高警察がお礼にくるぐらいなものだぜ。

賢治 いや、そういうことではなくて……

第一郎 それにはほくはこれでも三菱商事の切れ者で通っているんだ。

来月からは満鉄へ出向することにもなっている。ここだけの話だけれども、関東軍の石原莞爾作戦主任参謀と組んで満州に一大ユートピアをつくろうというわけだ。ちかぢか満州はわが帝国の手引きで独立するんじゃないかな。これもここだけの話だよ。それでその新生満州国の政府の実業部局長がこのぼくなんだ。まちがったって捕まりはしない。そうだ、君はたしか日蓮大聖人の門下だと言っていたね。

賢治 ええ。国柱会の……

第一郎 石原莞爾参謀も国柱会なんだよ。

賢治 らしいですね。

第一郎 その石原さんの薫陶でほくも国柱会の信行員になったんだ。

君とは、いわば同門の兄弟ということになるねえ。たとえ「殺人現場を目撃しました！」と警察へ駆け込まれたところでどうってことはないがしかし君は同門の兄弟を訴えるようなことはすまい。

賢治 ……

第一郎 このところの日蓮大聖人の門下、法華経信仰者の台頭は目ざましいものがあるぜ。国柱会の会員ではないけれど、立正護国堂の指導者のあの井上日召も、それからいま、陸軍の青年将校たちに圧倒的な人気のある北一輝という思想家も、ともに日蓮宗なんだ。

賢治 それも知っています。

第一郎 ほくの解釈では両先生とも「国が正しい方向に向っているのか、また誤った方向へ向っているのか、それは法華経八巻に照してみれば一目瞭然である」とおっしゃっているように思う

んだ。そうして両先生は、「いま、国は、財閥や政府高官のよこしまな私利私欲によって、誤った方向へ流されつつある」という答をお出しになっている。さて、この誤りを、どう正すのか。両先生曰く、「それは法剣によってのみ可能である」。わかるかい、法の^{つるぎ}剣だぜ。仏法の剣によって私利私欲をむさぼる奴等を倒す。一殺多生。一個の悪を殺して大勢を生かす。……ほくは両先生に、『立正安国論』を北条時頼に叩きつけたときの日蓮大聖人の烈しさを見るような気がするねえ。両先生は現代の日蓮だ。

賢治 でも三菱は財閥の代表でしょうが。その三菱の社員の第一郎さんが、自分の会社の私利私欲に腹を立てている。なんだかおかしいですよ。いさぎよく三菱をやめて、その上でいうのならわかりますが。

第一郎 そこですよ、君。これからの三菱はデパート方式で行くんです。デパートには棺桶以外は全部そろっている。これですよ。三菱にも、いろんな考えの持主がいていい、いや、いなくてはならない、それどころかいるべきである。そうすればどんな思想から攻撃されても平気だ。「うちにもちゃんとあなた方と同じ考えの者がおります。いまこれこれの要職にあり、しかじかの仕事をしております」と逃げが打てる。ほくはそう会社の幹部に進言し、それが容れられての満鉄出向なんだ。どうだ、君も満州へ来ないかい。満州は広い。だからたくさんの肥料がいる。月給はずいぶん出せると思うよ。

井上ひさしは、国会会員で「満州国」立国を画策した関東軍参謀の石原莞爾や、血盟団事件を起こしたテロリストの井上日召、さらには、

二・二六事件の理論的首謀者といわれる北一輝といった右翼の日蓮主義者の名を登場させている。この視野の広さが重要で、石原莞爾・井上日召・北一輝といった、いわば「強い日蓮」主義者が日本の軍国化や帝国主義化を推し進めていった歴史的事実から目をそむけることなく、その歴史のなかに宮沢賢治のもつ日蓮思想を「弱音を吐く日蓮」として提示しているのである。

次に問題になるのは、「弱音を吐く日蓮」の根拠ということだ。井上ひさしは、どのような根拠から「弱音を吐く日蓮」を創出したのか、根拠がなければ、単なる宮沢賢治びいきで片付けられてしまうことになる。

3、姉崎正治著『法華經の行者日蓮』における日蓮像

田中智学の『日蓮聖人の教義』（明治43・3、国柱会産業株式会社書籍部）に、「日蓮聖人略伝」があり、宮沢賢治は当然それを読んでいたと思われるが、それは、井上ひさしのいう「強い日蓮」である。「弱音を吐く日蓮」はどこにいるのか。私が注目しているのは、一九一六（大正五）年十月に発行された、姉崎正治著『法華經の行者日蓮』（博文館）である。「序言」から引用する。

本書の材料は、徹頭徹尾、上人の遺文を骨髄とし又血肉とする。二三史料や伝説は、之を他に求める外なかったが、上人の一生と思想とは、その遺文四百篇だけで十分之を尽し得る。勿論、四百篇中、批評研究を施すべき者も多少はあつて、例へば、波木井殿御書の如きは、偽撰として之を排除した。然し、大体に於ては、四百篇殆ど悉く信用すべき材料であり、特に真筆の存する者は、最も貴重すべき材料である。—略—

此の如くにして、本書は前後十四五年、特には最近六七年の間、

直接に上人の遺文に接した努力の結晶である。而してその研究には、常に宗教学上の通義、特に宗教心理上の比較考慮を費したのであり、従つて日蓮宗門の伝説や、前人の解釈等には拠らなかつた。それ故に、今までの上人伝と異なる結論に達した場合も少なからずある。上行の自覚と罪の意識との聯絡の如きは、その最も顕著な一つであつて、今までの伝記、此の一点を看過したために、往々上人の一生を神怪の中に葬った感がある。その他の点は、本書を読むで、今までの伝記と比較して見る人の判断に任せる一略—

姉崎正治は、若くして東京帝国大学の教授となり、宗教学講座（仏教・キリスト教）を開設、発展させた人物である。「ハーバード大学の教務担任中、ロイス教授と思想を交換して、談、上人に及び、ロイス氏が頻に、上人に関して一書を書く事を勧められるに及んで、断然意を決して、今までの研鑽を纏める方に一步を進めた」とも記されているように、極めて学問的な書で、「今までの上人伝と異なる結論に達した場合も少なからずある」と自ら述べ、特に「上行の自覚と罪の意識との聯絡の如きは、その最も顕著な一つ」という視点が注目される。姉崎正治は「今までの伝記、此の一点を看過したために、往々上人の一生を神怪の中に葬った感がある」と、それまでの日蓮像に批判的とも受け取れる発言をしているのである。姉崎正治は、日蓮のおそらく書簡を読むことにより、「神怪」としてではない、人間味あふれる日蓮を見出したのではないかと思われる。井上ひさしのいう「弱音を吐く日蓮」と完全に一致するわけではないが、「強い日蓮」だけでない、自己を見つめ直す日蓮の姿を描き出した『法華經の行者日蓮』は、当時の他の日蓮関連の本には見出し得ない特徴といえるはずである。

即ち入山退隱といふ事も、法華經行者の、当に果すべき大業の一段に外ならず、而してその意味は、懺悔滅罪と理想成就とにあるのである。

先に示した如く、身延山御書は一方山中生活の風光を述べて、その間に月日を送る行者の心情を明かすと共に、一方は痛切な自己告白であつて、その告白の内容は懺悔滅罪にある。滅罪の観念は、佐渡時代に著しく内観省慮を加へ、単に他人の謗法罪を叱咤するばかりでなく、直接に自分自らの罪を自覚して、今生にその罪を消さうといふ方に向いて来た。此の傾向は、身延生活の静閑裏には一層進んで来た。(同前書)

「単に他人の謗法罪を叱咤するばかりでなく、直接に自分自らの罪を自覚して、今生にその罪を消さうといふ方に向いて来た」という日蓮解釈は、客観的、学問的検証を経て現れ出たもので、「懺悔滅罪」を願う日蓮に、姉崎正治は「日蓮の行者」としての真の姿を見ようとしている。「懺悔滅罪」とは、若き日に阿弥陀仏を信仰していた自分を「謗法」と捉え返し、「過去の謗法の、わが身にあること疑なし。此の罪を今生に消さずば未来いかでか地獄の苦をば免るべき」と自覚することから始まるのである。

宮沢賢治がこの姉崎正治著『法華經の行者日蓮』を読んでいたことは、小倉豊文『「雨ニモ負ケズ手帳」新考』（東京創元社、昭53・12）の「はしがき」で、「高山樗牛の親友だった宗教学者姉崎正治の著「法華經の行者日蓮」を読んでいたことを、初めて私に話してくれた関登久也氏」と記していることが傍証となる。ただ、「賢治が初めて法華經を読んで感動したという伝説的事実と、国柱会入会という具体的事実との間」と記されていることから分かるように、小倉豊文は『法華經の行者

日蓮』を国柱会への橋渡しと位置付けている。

宮沢賢治が『法華経の行者日蓮』を大正五年の刊行早々に読んでいたとするなら、国柱会への入会はその後のことであるゆえ、橋渡しのな意味を認めることには妥当性があるということになるだろう。しかし、宮沢賢治の熱烈で全面的な国柱会や田中智学への傾倒が確認できるのは、一九二一（大正十）年をピークとした数年であり、特に花巻農学校の教諭となり地元で根差した生き方を模索するようになる宮沢賢治には、国柱会や田中智学の影響という視点からだけでは解くことのできない思想的な複雑さがある。詩や童話作品の多様性を見れば、国家主義的、または帝国主義的な日蓮主義者と決めつけることの危険性は明らかである。

また、先に引用した関井光男の「日蓮の遺文や御書を読むには、僧侶といえども智学の整理した『類纂高祖遺文録』（一九四二・注-正しくは一九一五、大正4年）を見るほかなかった」だが、確かに『類纂高祖遺文録』を宮沢賢治が読んでいた可能性はあるだろう。しかし、実際に宮沢賢治が所持していた御書は加藤文雅編輯校訂『日蓮聖人御遺文』（霊良閣蔵版）であった。初版は明治三七年、大正一〇年の段階で訂正八版を数えている。霊良閣蔵版『日蓮聖人御遺文』は、宮沢賢治が引いたとされる傍線のあることも確認されており、この書の存在は、宮沢賢治の法華経理解や日蓮理解が必ずしも国柱会とばかり結びつくものでないことの証拠となるだろう。

4、日蓮の書簡

宮沢賢治にとって、姉崎正治著『法華経の行者日蓮』を読んだことが、人生のどこかの段階で、宮沢賢治を時代の雰囲気とは異なる、独自の日蓮主義者に変えていく契機となった可能性が残されると私は考えている。宮沢賢治の日蓮像に「強い日蓮」のほかに「弱音を吐く日蓮」があった

とするなら、それはおそらく日蓮の人間味あふれる弟子たちへの書簡から来ているはずである。

井上ひさしが『法華経の行者日蓮』を読んでいたのか、また、宮沢賢治がそれを読んでいたことを根拠に「弱音を吐く日蓮」を創出したのか、その点を明らかにすることはできていない。井上ひさしの寄贈図書を管理している山形県川西町にある「遅筆堂文庫」（昭和62年開設）には、『法華経の行者日蓮』は保管されていないようである。したがって、井上ひさしは『法華経の行者日蓮』を読んでいなかったと判断すべきかもしれない。しかし、日蓮の書簡集は読んでいたはずとの推定は許されるだろう。「遅筆堂文庫」には日蓮に関わる寄贈図書が三二点あり、日蓮の遺文関連も数種類含まれている。井上ひさしが日蓮の書簡を虚心に読んだとするなら、「弱音を吐く日蓮」すなわち「〈デクノボー〉としての日蓮」の姿を見出したとしても不思議ではないと私は考えている。

最後に、日蓮の書簡を一通紹介する。

「上野殿御返事」で弘安二年(一二七九)正月三日、身延から宛てた、日蓮五十八歳の時の書簡である。引用は加藤文雅編輯校訂『日蓮聖人御遺文』（昭6・7、訂正13版、霊良閣蔵版）からである。ここで日蓮は弱音を吐いているわけではないが、雪が降り積もり、食べるものにさえ事欠く山の中の日蓮に届けられた上野時光からの届け物に、心の底から感謝の気持ちをしたためる日蓮の姿勢は、極めて人間的なものといえるだろう。

餅九十枚、^{やまのいも}薯蕷五本、わざと御使を以て。正月三日未^{ひつじ}の時に、駿河ノ国富士郡上野ノ郷より甲州波木井の郷身延山のほら（洞）へおくりたびて候。夫レ海辺には木を財とし、山中には塩を財とす。早魃には水を財とし、闇中では燈を財とする。女人は夫を財とし、

夫は女人を命とし。王は民を親とし、民は食を天とす。此の兩三箇年は日本国の中に大疫が起りて、人半分減じて候歟。去年の七月より大なるけかち（飢渴）にて、里市とをき無縁の者と山中の僧らは命存じがたし。其の上日蓮は法華経誹謗の国に生れて、威音王仏の末法の不輕菩薩の如し。将又、歡喜增益仏の末の覚徳比丘の如し。王もにくみ、民もあだむ衣もうすく、食もとほし布衣にしきの如し、草葉をば甘露と思ふ。其の上、去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ。年返れども鳥の声ならではをとづる人なし。友にあらざば誰か問フべきと心ほそくて過し候処に。元三の内に十字九十枚満月の如し。心中もあきらかに生死のやみもはれぬべし。あはれなりあはれなり。こうえのどの（故上野殿）をこそ、いろあるをとこと人は申せしに。其御子なればくれない（紅）のこき（濃）よしをつたへ給へるか。あい（藍）よりもあを（青）く水よりもつめ（冷）たき氷かなと。ありがたしありがたし。恐々謹言。

ここに引用される「不輕菩薩」は〈デクノポー〉に近いイメージと解することができるのではないか。宮沢賢治にとっての「不輕菩薩」（『雨ニモ負ケズ』手帳）と重なることが確認できる。